

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	新 井 馨
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目 現代美術のプラクシスから考察する図画工作・美術科における〈創造〉性 —こどもの生きる社会で発揮される創造性を育成するカリキュラム開発のために—			
論文審査担当者			
主 査	教 授	中 村	和 世
審査委員	教 授	松 本	仁 志
審査委員	教 授	内 田	雅 三
審査委員	准教授	池 田	吏 志
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、社会や関係に主軸をおく現代美術を図画工作・美術科に積極的に取り入れ、こどもが日々生活する、実感を伴った社会で培われる創造性を明らかにすること、また、創造性を見取る指標を開発することを目的としている。本研究の研究設問は次の3点である。①今日までに、現代美術は美術教育にどのように取り入れられているのか。②こども達は自らが生きる社会をどのように捉えており、そこで発揮される創造性とはどのようなものか。③こどもが生きる社会で発揮される創造性をどのように評価するのか。</p> <p>本論文は、序章と終章を含めた7章で構成されており、各章の概要は次の通りである。</p> <p>第1章は、研究設問①に対応し、1958年から2017年までに公表された現代美術と美術教育を主題とする国内の先行研究100編のレビュー及び海外の主要な研究論文のレビューが行われ、年代別の傾向、テーマ、実践校種等の動向が整理されている。第2章では、レビューを踏まえた問題の所在として、現代美術をテーマとする先行研究の多くが理論研究であること、また現代美術を取り入れた授業でどのような資質・能力が培われるのかが議論されていないことが指摘され、上述の研究目的が設定されている。第3章では、研究設問②に対応し、小学校4年生から中学校3年生の全学年230名を対象にした、こどもと教科等の学習や社会との関連に関する2つの予備調査の報告がなされている。調査1では、主に学校における教科等の学習やこどもの日常生活との関連が調査され、こどもが社会を捉える要素を6種類のカテゴリーで示している。調査2では、図画工作・美術科と他教科等との接続及び学習内容の転移に関する意識調査が行われている。調査の結果、図画工作・美術科での学びが他教科等の学習やこどもの日常生活において、汎用性のある資質・能力として認識されていない状況を明らかにしている。同じく研究設問②に対応する第4章では、本論文の鍵概念となるこどもが生きるアクチュアルな社会で発揮される創造性の本質について検討されている。本論文において、社会とは複数の意味が積層する場とされ、創造性とはこどもが他者と共に学習を行う中で当人の意味や価値が変容し、更新され続けていくことと定義されている。第5章では、研究設問③に対応し、創造性を評価するための理論枠組みが検討されている。本論文では、心理学者であるGlăveanu (2013) の The Five A's Framework が援用され、「生成されたコト」、「アクチュアルな社会に生きるこど</p>			

も」, 「<創造>性の他者」, 「場におけるもの」, 「<創造>的行為」を構成要素とする各要素間の相互作用を見取る創造性の評価指標が提案されている。第6章では, アクション・リサーチの研究デザインが検討され, デンマークの作家である Eliasson (1967-) による作品《クリティカルゾーンの記憶 (ドイツーポーランドーロシアー中国ー日本)》(2020) に着想を得た学習が開発されている。第7章では, A 小学校6年生の70名, そしてB 小学校5年生の35名を対象にアクション・リサーチが実施され, 本論文で提案された評価指標の妥当性が検証されるとともに, 修正がなされている。分析では, こどもの行動や発言を含むトランスクリプトが上述の創造性評価の五要素をベースに定性的に分析され, 時系列で各要素間の繋がりや相互作用の特性が明確化されている。これを通して, こどもの意味や価値の変容の過程及びその過程で発揮される創造性のレベルが特定されている。アクション・リサーチでの実践と検証を経て, 4段階のレベルからなる<創造>性の評価指標が提示されている。

本論文は, 次の3点で高く評価できる。

第1は, 国内外における現代美術を取り入れた美術教育研究の動向と課題を明確化したことである。現代美術の定義は多様であり, 現代美術を美術教育に導入することの重要性は, 近年, 国内外で広く認識されているが, 計画的, 組織的に実施が図られていない状況にある。1950年代から蓄積された研究論文を包括的に整理し検討したレビュー論文は国内外にはない。これに対し本論文では, 先行研究の論点が整理され, 現代において重要である社会や関係を主題とした現代美術の取り組みを学校教育, 特に小学校教育で行う新しい可能性が示唆されている。

第2は, 小学校4年生から中学校3年生までを対象とした質問紙調査により, 図画工作・美術科の学びの転移に関する実態と課題を明らかにしたことである。調査では, 図画工作・美術科の学びとこどもの日常生活との繋がりにおいて, 感性や美, 想像性や創造力といった図画工作・美術科の本質的な学びが他の教科等や日常生活に転移する実態も示されている。このような調査結果は, 図画工作・美術科と他の教科等の学習, そしてこどもが生活する社会との接続を図るカリキュラム開発のために貴重な示唆を与える。

第3は, 上述の要素間に着目した創造性の評価指標を構築したことである。本論文の新しい提案は, 要素の間で起こるこどもの発話や行動に着目した評価の在り方を示す点にある。これにより, こどもの活動を出発点としながら意味や価値の生成が繰り返される過程, また, こどもが生活する社会に対する問題や関心へと間断なく接続される過程の評価が可能となる。このように, 要素間を往還し, 相互作用するこどもの動的な創造性発揮の姿を評価対象とした点は意義ある成果である。さらに, 図画工作・美術科特有の着眼点や評価指標を明確にしたことで, 意味・価値が生成されやすい環境設定の可能性がより開かれる。

以上, 審査の結果, 本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 4年 2月 14日